

調べてみました

21世紀の親指シフトキーボード

村田忠禧
(会員)

日本において日本語漢字かな混じり文書がコンピュータで処理できるようになったのは1980年代に入ってからのものである。80年には文字入力装置としてのキーボードがJIS規格に制定された。英字は26字なので3段の配列に収まるが、現代日本語のひらがな文字は87字に達し、3段には収まり切らず4段目(数字キーの部分)も使用する

生き残った

日本語かな入力方式

日本にはパーソナルコンピュータ(パソコン)が普及する前段として、ワードプロセッサ(ワープロ)という文書処理機の全盛期が存在した。メーカー各社は日本語文書処理の開発にしのぎを削り、さまざまな分野で貴重な成果が生み出された。JIS配列以外のキーボードによる日本語入力についてもいろいろな方式が提起されたが、富士通が開発したワープロOASYSに搭載された親指シフトキーボードは、かな入力でありながら快適な日本語入力ができる、と大変好評を博した。筆者も30年前にOASYSを使うようになって以来、その魅力に取りつかれ、親指シフトキーボードの愛用者になっている。思考しながら長文の文章を書く場合、このキーボード以外では作業をする気が起らない。

親指をシフトキーとする効能

かな文字には清音、濁音、半濁音、拗音、促音、撥音などが存在し、個々にキーを割り当てると大きなキーボードが必要になってしまい、実用的ではない。しかしかな文字には一定の規則性がある。例えば「は」「ば」「ぱ」のように清音、濁音、半濁音いずれも存在するもの、「か」「が」のように清音、濁音があるもの、「ま」のように清音のみのも、さらには拗音「ゃ」、

撥音「っ」のように小書きするものなど、いくつかのパターンに分けることができる。

いっぽう、入力する指先に注目すると、ヒトの親指は他の指に比べ関節が1つ少なく、短くなっている、他の指にたいして自在に動くことができる。富士通の技術者はこの親指の働きに着目し、英字キーボードではスペースキーとしか使われていない親指キーを積極活用することを目指したのである。

写真は筆者が現在使っているキーボード(FMVB613)である。Hキーには「は」、「み」、その左側のGキーには「せ」と「も」が、上側のYには「ら」「よ」とその間に「ば」、下側のNでも「め」「ぬ」の間に「ぶ」が刻印されている。さらにその下に横長の「親指右」「親指左」と刻印されたシフトキーがある。Y・H・Nより右側のキーは灰色に、左側は白色に色分けされている。これがNICOLA配列にもとづく親指シフトキーボードである。

が恶かった。それに代わるものとして86年には新JIS配列が制定されたが、小指をシフトキーにするという「小技」を使ったため、実際にはまったく見向きもされなかった。今日、パソコンでの日本語入力はローマ字入力が当たり前と考える人が圧倒的で、JISによるかな配列の

規格は有名無実の状態である。



具体的な入力の方法を説明しよう。かな入力モードでHキーを打鍵すると「は」になる。Hキーは灰色グループに属しており、同じ側に位置する親指右キーを同時打鍵すると「み」になる。Hキーと対向する側に位置する

親指左キーを同時打鍵すると「は」の濁音「ば」になる。Yキーの「ら」に濁音は存在しない。そこでYキーに対向する親指左キーを同時打鍵すると半濁音「ぱ」となる。こうして文字キーと親指シフトキーとの組み合わせで一つのキーで3種類のかな文字の入力ができることになる。かなの配置を使用頻度の多さにより、中段のホームポジションに置き、ついで上段、下段の順に、また指の動きにより、人差指の分担を多くし、中指、薬指、小指の順になるよう配置している。したがってローマ字入力に比べ、打鍵数が少ないだけでなく、なめらかで快適な日本語入力が可能になる。

なぜ親指シフトキーボードは普及しないのか

親指をシフトキーとして活用することの効能を発見し、製品として世に提供したことは富士通の貢献であるが、あくまでも一企業の製品の機能に過ぎないものとして扱われた。本文の冒

頭で紹介した通り、JISキーボードでのかな入力が不便なことは衆目の一致するところ。親指シフトキーボードが優れた日本語入力方式であることは数多くのユーザーの実践が証明している。この文章を書いている途中の4月4日『朝日新聞』夕刊「凄腕つとめにん」という欄に「1分間に起こす文字数300字超」との見出しで大和速記情報センター速記部主任の藤田貴子さんを紹介する記事があった。彼女の凄腕の秘密は「親指シフトとかな入力」にあること。

このように親指シフトキーボードに利点があるのに、なぜ普及しなかったといえ、他メーカーもその良さを認め採用すればよかったわけだが、狭量なライバル意識により、親指シフトキーボードをJIS規格として認定せず、新たなJISキーボード規格を制定する道を選択した。富士通側の対応にも問題があったと思われる。世はワープロ専用機からパソコンの時代に移り、とりわけMicrosoft社のWindows

が世界のパソコン市場を席巻することとなり、それへの対応に追われ、日本語入力方式の普及・拡大に力を入れなくなった。親指シフトキーボードを使うためには専用の入力ソフトとキーボードドライバが必要なのだが、その最新版がJapanist 2003のままになっていることに富士通の消極性が端的に示されている。やむを得ない選択なのかも知れないが、せっかく日本が生み出した優れたコンピュータ文化を大事にし、それを積極的に発展させようとしなのは残念でない。

そのように冷遇されてきた親指シフトキーボードでありながら、今でも生き長らえているのは、愛用するユーザーが根強く存在しているからである。筆者はKB613という親指シフト専用キーボードを使っているが、JISキーボードでもエミュレーションソフトを使用することで親指シフトでのかな入力ができるようになっていく。Windowsパソコンだけでなく、Mac O

SXでもNICOLA入力が可能とのこと。詳しくは日本語入力コンソーシアム(NICOLA)のホームページをご覧ください。
<http://nicola.sunicom.co.jp/>

筆者もエミュレーションソフトを試したことはあるが、JISキーボードでも擬似的にかな入力ができる、という程度のことであって、やはり専用キーボードでの入力にはかなわない。ソフトウェアだけでなく、ハードウェアもそろって本来の能力を発揮できるのだ。その点でハード面での進化・新環境への対応が求められている。

親指シフトの「スマートキーボード」化

前述した通り、今日では専用の親指シフトキーボードでなくとも、エミュレーションソフトによって擬似的に親指シフトによるのとはほぼ同様な入力が可能である。しかもWindows以外のOSでも可能とのこと。ただしそれを実際に利用している人は必ずしも多くはない。や

はり一般に普及するには、特に世界に広めようとするには、ソフトウェアとともに、使いやすい本物のハードウェアの存在が不可欠である。その点で筆者は最新の科学技術の成果を活用することに期待したい。以下は素人考えの提案である。

第1 ハードウェアの提供として3Dプリンタを活用して親指シフトキーボードを作れないか。3Dプリンタなら金型を作らなくても比較的容易にキーボードの試作ができるはず。それによって親指シフトキーボードを気軽に体験できる機会を増やせないだろうか。自分の手の大きさにピッタリサイズのキーボードもできるし、文字キーだけでなく、さまざまな必要性に合わせてキーやスイッチを加えることも可能だろう。キーボードの形状そのものもいろいろチャレンジできるだろう。

第2 キートップの文字表示を刻印で固定させないで、用途に応じて自在に表示できるよう液晶あるいは有機ELによる電

子表示にできないか。これは多言語対応キーボードになるための不可欠の要件でもある。キートップの表示が自由になれば英字配列においてもQWERTYだけでなく、英文入力に適したDvorak配列も選択できるようになるだろう。

第3 キーボードをパソコンから独立した文字入力専用端末とする。パソコン等との接続にはBluetoothという近距離無線通信規格を用いる。こうすることでパソコンだけでなく、Bluetooth規格対応のさまざまな機器、例えばテレビなど家電製品のリモコン端末に代わる「スマート家電」の入力端末機器(スマートキーボード)になりうるだろう。文字入力が重要である教育用機器での需要は特に多いのではないか。

第4 それぞれのキートップの文字表示を電子表示にするだけでなく、打鍵時の回数、圧力、深度等を測定できるようにして、そのデータ分析にもとづいてキーの配列やキータッチの微妙な違いを調整できるようにすれば、各人の使用目的にかなった、よりスマートなキーボードになるだろう。

第5 スマートキーボードの開発を日本だけ、特定の企業だけでやろうとせず、世界各国と共同して進めるべきである。日本語入力方式として開発された親指シフトキーボードは中国語(漢語)入力にも適している。親指シフトを世界に広めるうえで中国との共同開発が不可欠である。漢語を母語とする人口は世界に10億以上おり、漢語圏で広まることだけでもインパクトは大きい。しかも中国は多民族国家である。チベット語、ウイグル語、モンゴル語など多くの民族言語における開発も期待できる。

JISキーボードの規格制定過程における狭量な対応を教訓にし、人類共有の財産となりうる新たな世界標準のキーボードを作るのだ、という遠大な意気込みで取り組む必要があるのではなかろうか。